

動静脈奇形症例集**1**

—手足—

企 画 に あ た っ て

動静脈奇形は治療に難渋する疾患の代表の1つです。形成外科医として診療していると、必ず数年に1症例は治療する機会があることでしょう。しかし、発症頻度が高い疾患ではないため、形成外科医をはじめどの科の医師もその扱いに苦悩することになります。出血する、治療させることが難しく再発する、放置すれば周辺組織を破壊する、治療しても周囲を含めた組織欠損を生じるなど、患者と治療者の悩みはつきません。まとまった数の治療経験をもっている専門家や施設は限られているため、各施設で治療している症例の情報をより多くの専門家同士で共有する場が必要と考えました。

本特集では、その第1弾として「手足の動静脈奇形の症例」を集めました。手足は日常生活を送るうえで機能的に重要な部位であるとともに、血行動態からすれば細い先端に向かう末端器官です。その部位の動静脈奇形は、機能的に組織を温存することが優先されながらも、血行動態からすれば極めて危うい状況に置かれています。

動静脈奇形を診療している全国の各施設から、良い経過をたどっている症例ばかりでなく、難渋している症例についてご提示いただきました。一施設一専門家の経験を多くの読者で共有し蓄積していくことで、次の突破口が開くことにつながります。動静脈奇形に悩まされている患者さんと治療者のQOL向上のため、今後「動静脈奇形症例集**2**顔面（67巻1号予定）」、「**3**躯幹・その他（67巻2号予定）」を特集します。

信州大学形成外科 杠 俊介